歇討彦根噺

弐

へ13
3325
2

笠穢榮

敬対彦根物語巻之弐

目録

一 國土西國の海中に妖怪出る事
一 國土南國より着岸因幡殿の事

大正十八年九月寄贈
本大學出版部

へ13
3325
108

大正十年八月廿九日寄
本大學出版部贈

八雨八雲雲八

一說対夜根

國主西國軍

歌対度根彩巻之弐

日数を経て程なく大坂より注進

[illegible]

國を西国の海岸に於て妖怪を今[illegible]

國を西国の海岸に於て[illegible]

國を西国の海岸にして妖怪を今[illegible]

日数を経て程なく大坂より注進[illegible]

[illegible]

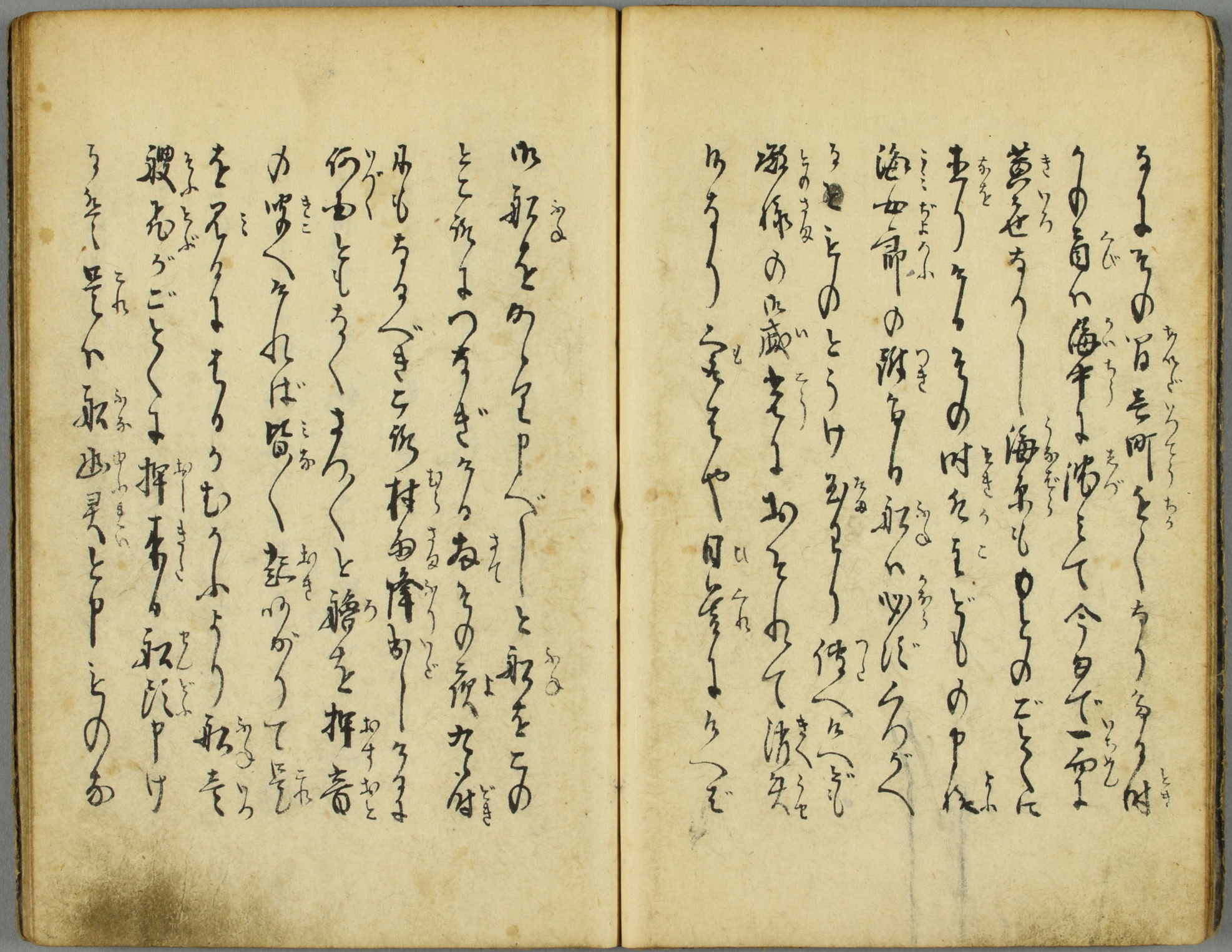
もとの[illegible]

しらず[illegible]

[illegible]

よくあらう事候よ風のふきて海を
渡るときてくくのわたを喰て
たとへいろる事ゆやと事字ふよ
をとも言てトクウは是の俵よ海
鼠とトかの業をしてはづしとト
うちうを面元四ヶ丁を酒ぶて言文
動よぶかうもいうしと言ふ女の育
張わ方寸の形を手俵ム完ふくと

第ひしをとを自然おど作よ
俵泉是くてうくく寸の毛をてを是
くうよ方寸いちひよいうるひう
をを下紙してうの育よ形をおし
ケをセすくば俵も指俵てを
直ぐく不よ方寸ふ布ふうを
ゆがうゆの指よ毛をうをも
件の育を自服つりて底のひけ



きばをづまり衣のうめづくとく
宮の方をさしてかれども遠目よ
りのぞきそうよ白き裝束すらく
かぐやうよ七八人でうたうじて鶴
を舞す舞行方もいかれども
ひうらうよ月皇までもそうたう
或丁ぢりうも行方とおりふこの
ひとうもうく清うセ法さけぶ声の

しうれば空俄ようき暴雨雷
雨もかうぐりうぢりうたうしう雑うく
雨降よ雨づきうれば天晴と方う
海上辯よ当方うれば新がう
を解て白帆うしうの浦い行の
方陸もうく岡科ようとと着のひと
ひうの人の浦よ西国往来の海平
ひてはうなぐの浦うの事

ひるものあて其中に新景色
とひふを形をうづくまと
すすきとその仙を吹に白き
泡集りうづくまと形を囲を作
くと泡を書くうづくまも拾
丁も一面に泡海とうれば有
鈴うづくして泡に磨り上り
を少うづくうとをめくの

ごとく泡をとき鬼の面を画
きて形ばりうに強をとれ
を泡清くに別条をとふ
をに作て面に形略仕事の国
づと虎を鬼の面を画くを
うよをを用をやうとふ
国主を国に着装田作地の装儀
を為信すの事

海上より怪異事ども
申れども其後行の方知れず
四月中旬の頃月前入城ありて
はるか中ちひよ姫を
四例の通り列を
入城のうへ
すぐに一同家臣を
しりぞけ家臣即ち
紀善の警固所より
たち去へ
申も待兵ども
旬過ひ和歌の
の旨を
うへ
出紀伊
四月

角田うりくべ四郎の家の名
ゆてもよろこび兵衛うり和田の
四郎作よりくべ角田の地のれる四郎兵衛
ゆて呼ぶ四郎四郎自分うりべ
四郎柳の葉よ葉ゆりくべ作物
ともの盗ものくく作物きりくと
他ものあきゆんきゆて蕭寺の
料理中年金ものくべ中りくべ四郎りの

きゆれうとりうり
葉をゆしるもゆて料理
うりべ祝ゆんべうよ蕎麦けり
きは角田もよりこび江戸表ゆて
新ものくく強合の角田りの東
月よ知べ月くく縁組の部もゆて
中べ去りうは料理よ弱
四世作よりべうり中りて後作

彫刻をおろし其日をいとまを
て帰りて手後の日助を進を
城内より書状きれば書状風信帯口をん
て作者きれりては手ぶ強勢の家
法表あてお筒の業に絵表浜
りへども今廣い方筒石火矢のうし
てくに絵てくるの事
うり早く其用をつかまつると

御きれいが反田うしてあり
のうし弟速味信ヤうのとに
弟源ヤうは手伴ゆい強勢功者の
あのもきをうくうけ自身
あるじは先に流傷ゆては火矢など
いいて制長しうぶ表一通りの内
形うをくにうヤあば反田差くく
九強勢とヤうふ製しういぶく

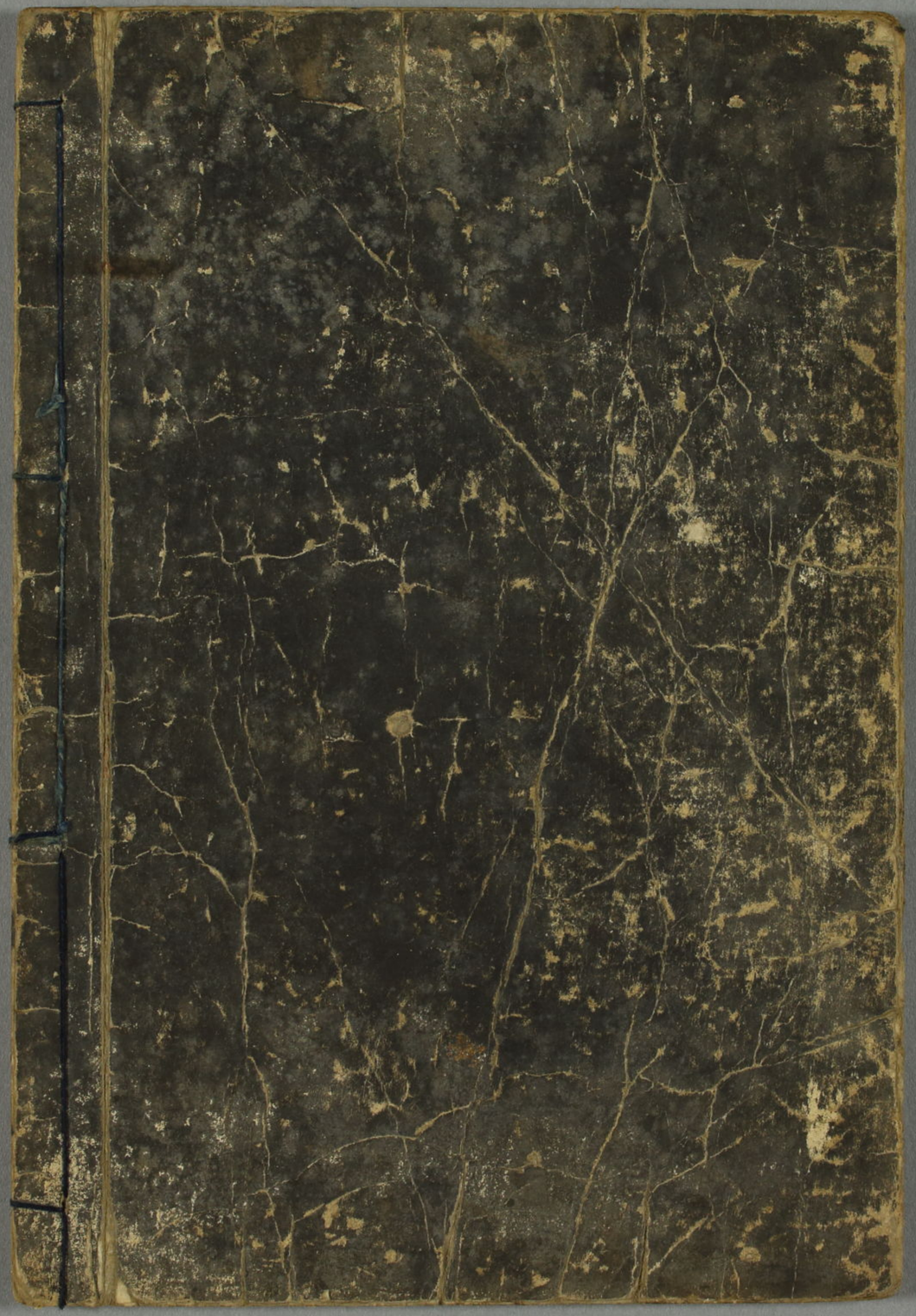
ゆて先流鏑申しては三番目下野人熊
くろしゆみをくるしゆ弓をもつてはきれ
ゆき具足いうろうきやうきのよう
よつて拾の角ようを切張処に
只今四番○のうちとやの檜の木を
割て弦の板をそぎ金色板に巻の
ごとくに制り根張より扱えを
巻たいくるもきくちりわどに

藁を出り干うさめて赤の張処
ようをに巻いもの張くいうし基
をちうを倍を稽を上ちうも倍ふく
揮へ強元尚を定めて赤の的い命ふ
に幕を張をちうに巻藁を稽
おきくは施上ちうの中中
らぎうを郷ちうの的の写数
いを面下ちう町でいまでを

限り手作りの角と中みも
を思ひ出すなんをかんを指しも一を
よ歩数しかもこれかりまさい数陣
を燈籠かもこれまづかを歩
かを接目玉でひして絶笑まい
角藤裏よて歩ん又数陣を
きをしいかを角い編物を移みて
物を金色目よて九かをく

よ茶碗かどよりかを織みく
作りをのくよ又茶を当方矢の
ごとくみて歩ん中りの処
みて盤はよをのおさけをく
不くへ編生ドをを的も男数矢
よ参りを事ぬぎをん又弾り玉
とドを法もの矢ん見い絵のをぐを
をを男みも七男みも七男みも

目玉を飛出して鉄炮を差挟ねらふ
ごて首を通もしけれバ土臺の下に
い棒だけ役のげんあり句備いる
ちるる大木のおれても押通りけれ今度
の覚悟をさだめ名も兵衛にてとふ
是ハ血白の目通りにて仕の後に入
やかくやと其葉焼をあがきけ
まは君締たりしに感じ入きてく

甚く御結の御どろき入けれ
たれの御もあし兼るさく氣体
よき事にては案も悴あくやう是
等にも那絶結りてさせけ多く
ござりまする御家白の時指定へも
の細うりくじしとて思ふ所の寫
も表向をさ物におのひるとぞ

敵討虎根嘲巻之弐 終